

東部管内青年部・西部酪酪会

六月二十日 たかみや湯の森

## 東部・西部青年部 地域間交流会

東部管内青年部(部長 藤井康浩)と西部酪酪会(会長 吉川栄樹)は、地域間交流会を開催し、東部地域から八名、西部地域十名、全酪連一名、広酪からは経営支援課の竹ノ内寛治課長補佐、加藤祐一主任の二名が出席し、合計二十一名が参加した。

開会にあたり、吉川栄樹会長は「本日は年に一度の会なので、しっかりと交流を深めましょう」と挨拶し、乾杯にあたっては、藤井康浩会長が「自分たちの考えを言い合って、意義のある会にしましょう」と意見交換へと移った。一年ぶりの再会とあって、久しぶりの対面に話題は尽きず、熱く語り合われていた。

閉会挨拶では、後案勝也代表監事(広酪)が「若いメンバーが今後、どんどん役員になって、理事会などで、意見を出してほしい」と地域を引っ張っていく存在が増えることを願い、締めくくられた。



神石地域酪農生産振興協議会

六月二十七日 湯つ蔵さんわ

## 県内の生産基盤を危惧 後継牛確保が課題

神石地域酪農生産振興協議会(会長 藤井鉄男)は、会員五名の他、関係機関から五名が出席し総会を開催した。

藤井会長からは「会員五名のうち出荷戸数は二戸となってしまうが、戸数が減少すれば、生乳輸送コスト等の上昇を招く可能性もある。子牛価格が高騰し、後継牛が足りない状況にもあり、今後とも酪農経営が継続できるよう関係機関のご支援を頂きたい」と挨拶された。

来賓の入江町長(神石高原町)からは、平素の畜産振興への御礼とともに、以前は十九戸も生乳出荷者がおられたといった町内の酪農情勢に触れた挨拶があった。

広酪から出席した竹ノ内寛治課長補佐(経営支援課)は、第八次中期計画や牛乳月間の取り組み、事業所・倉庫の在り方、乳質ペナルティ使途、研修会、TMR等の情報提供を交え挨拶を行った。

議事は何れも承認され、その後は、会員の奥様方も参加され、楽しい話題と笑いの絶えない交流会を過ごし、このほど廃業され、生乳出荷がなくなった河上大樹氏からは、これまでの御礼と今後の地域貢献への決意が述べられた。



芸北酪農部会

六月二十八日 J A 広島市芸北支店

## 第四十七回通常総会 酪農環境の変化を相互扶助で 乗り越える



(挨拶する上村会長)

芸北酪農部会(会長 上村秀一)は、第四十七回通常総会を開催し、会員四戸全員の出席のもと、総会は有効成立することを伝え、各議案を承認した。

来賓には、北広島町、NOSA I 広島北広島支所、J A 広島市からの出席があり、広酪からは寺道弘生課長(生産振興課)と加藤祐一主任(経営支援課)が出席した。

開会にあたり、上村会長からは「TPPはアメリカの離脱により、廃止に向かうかと思えばそうではなく、まだまだ予断を許さない状況にある。飼料もまだ高く、その中でも酪農を休むことはできないので、会員相互で、助け合いながらやっていきましょう」と挨拶した。寺道弘生課長からは、直近の酪農情勢等を交え、情報提供し、総会終了後は、会員相互に和気藹々と意見交換や交流を深めた。



甲奴郡酪農組合・神石地域酪農生産振興協議会

七月五日 三次市内

## 家畜供養と感謝

### 甲奴・神石合同畜魂祭

甲奴郡酪農組合(組合長 溝邊清春)と神石地域酪農生産振興協議会(会長 藤井鉄男)は、出雲大社備後分院(三次市三良坂町)にて合同畜魂祭を開催した。総勢二十名の参加があり、広酪からは竹ノ内寛治課長補佐が参加した。

当日は県内各地で警報が発令され、三次市内では、河川氾濫や避難勧告が発令される悪天候ではあったが、参加者の願いが通じたのか徐々に小雨となり、無事に合同畜魂祭を執り行うことができ、参加者の皆さんはしっかりと牛の健康を祈願することができ、安堵された様子であった。

その後、三次市内の焼き肉「ふるさと」に会場を移し懇親会を行った。溝邊清春組合長は八月の消費者交流会(シヨージ)の開催協力をお願いし、「生き物を飼うという事は一生懸命に飼養管理を行うことにあるが、事故が起きてしまうこともある。仕方がないとの結論に至ることもあるが、牛にしっかりと感謝して頂きましょう」と家畜への感謝の言葉と共に挨拶された。

続いて、山陽乳業(株)の中山篤志顧問からは「もう少し、無理をしない程度に牛乳を搾って欲しい」と牛への労いを込めて乾杯の発声を行い、和気藹々とした雰囲気の中で懇談されていた。最後に藤井鉄男会長から御礼の言葉で交流会を閉じられた。



西部楽酪会

六月十三日 西部事業所

## 総会・役員改選 新会長に吉川栄樹氏

西部楽酪会(会長 小野正行)は、会員九名の出席のもと総会を開催した。

今年度は役員改選期にあたり、新会長には吉川栄樹氏、副会長兼会計には山尾稔之氏、監事には福原務氏を選任した。事業計画では、7月中旬に研修会を企画する予定とした。

## 第10回

### おいしい酪農経営!!

## 100万円の導入牛で酪農経営は成り立つか?(2)

全国酪農業協同組合連合会 購買部酪農生産指導室課長

たんと やすし 丹戸 靖氏



先月は、100万円の初妊牛を導入したケースを余剰金の平均値(15万円/頭)から考えてみました。その結果、余剰金だけで償還するためには・・・  
**導入価額 100万円 ÷ 余剰金 15万円 = 6.7年**

あくまでも集計結果からの計算ですが、7産しないと元が取れそうに無いことが分かりました。今日は、さらに、個体乳量と乳牛の供用期間のパターンから導入牛100万円で成り立つ酪農経営の条件を見ていきます。

表をご覧ください。導入牛の個体乳量ごとに採算がとれる供用期間を縦軸に示しました。

例えば、個体乳量8,500kgで、供用期間が4年の場合「△7万円(7万円の損失)」ということになります。

10,000kg牛群であっても最低4年間は搾らないと元が取れないということです。

これらあくまでも、平均値ですので個別の損益計算もしてみてください。

(表) 100万円の導入牛が元を取るまでの供用期間

/個体乳量 供用期間	8,000kg	8,500kg	9,000kg	9,500kg	10,000kg	10,500kg
1年	△85万円	△82万円	△80万円	△77万円	△75万円	△72万円
2年	△35万円	△32万円	△30万円	△27万円	△25万円	△22万円
3年	△18万円	△16万円	△13万円	△10万円	△8万円	△6万円
4年	△10万円	△7万円	△5万円	△2万円	±0	+2万円
5年	△5万円	△2万円	±0	+2万円	+5万円	+7万円
6年	△2万円	±0	+3万円	+5万円	+8万円	+10万円
7年	±0	+3万円	+5万円	+8万円	+10万円	+13万円

注) DMSシステム全国平均値から算出